

6. 過去3年間に経験した豚腎芽腫

○岡地 潔 (豊橋市食肉衛生検査所)
下司 高弘 (")
合川 敏彦 (")
山内 俊平 (")
細井 美博 (")

【はじめに】

腎芽腫は、胎生期の造腎組織である後腎芽組織を母組織とする腫瘍である。組織学的には腎芽細胞と上皮細胞及び間葉系細胞が様々な割合で混在し、その優位な構成成分によって、腎芽型、上皮型、間葉型の3型に分類される。腎芽腫は豚において比較的良好にみられる腫瘍で転移は稀であるとされている。当検査所で過去3年間に経験した豚の腎芽腫について比較検討し、若干の知見を得たので報告する。

【材料および方法】

平成20年1月から平成22年12月までに管内と畜場で処理された豚630,530頭中、腎芽腫と診断した6頭。原発巣及び転移病巣を10%中性緩衝ホルマリン液にて固定後、定法に従いパラフィン切片を作製し、病理組織学的検索を行った。

【結果および考察】

6頭を腎芽腫と診断(100万頭あたり9.5頭)し、うち4頭が肥育豚(100万頭あたり6.5頭)、2頭が繁殖豚(100万頭あたり101.2頭)であった。6例のうち4例(肥育豚雌2例、去勢2例)は腫瘍が腎臓のみに限局し、転移は認めなかった。うち3例(肥育豚雌1例、去勢2例)では腎臓に白色で境界明瞭な腫瘍が被膜内に隆起していた。この3例は組織学的に上皮型を示し、上皮細胞が尿細管様構造を作り、原始糸球体様の構造もみられた。上皮細胞は異型性を示し、核分裂像も認めた。残る1例(肥育豚雌)と転移のみられた2例(繁殖豚雌2例)では腫瘍は巨大化(長径24、55、60cm)し、残存した腎組織も認めた。この3例では組織学的に腎芽型の特徴がみられた。肉眼的に転移を認めなかった1例においても静脈内に腫瘍細胞が浸潤している像を認め、腎芽細胞の高頻度の核分裂像とともに高い悪性度を示した。またこの1例では、腎芽細胞とともに横紋筋線維の形成も認めた。

転移のみられた2例では肺に腫瘍を複数認め、1例では子宮にも転移していた。転移巣の組織像はいずれも原発巣に類似しており腎芽型であった。腎芽腫で転移を認める場合には血行性に肺転移する機会が多いことが成書にも記載されており、腎芽腫を疑った際には肺を精査することが重要であると考えられた。